

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：22701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23590609

研究課題名(和文) 医学部におけるコミュニケーション教育の有効性と実施上の問題点に関する研究

研究課題名(英文) Study on problems in efficacy and the enforcement of the communication education in the School of Medicine

研究代表者

後藤 英司 (GOTOH, Eiji)

横浜市立大学・医学(系)研究科(研究院)・教授

研究者番号：30153753

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円、(間接経費) 750,000円

研究成果の概要(和文)：医師にとって患者、家族、他職種とのコミュニケーションは必須である。文部科学省GPとして採択された医学部でのコミュニケーション教育プログラムを対象に、半構造化面接法による「聞き取り調査」で目標、方略、評価から取組みの類型化を行い、実施上の促進因子、阻害因子を明らかにした。

目標や方略は多様であり、相互に関連することが分かった。評価方法は適切ではないものも多く改善が必要であることが示された。このようにコミュニケーション教育のモデルプログラムを類型化することで、目的に応じた、有効性が高く、制約が小さな教育方法や評価を選択し、さらに継続しやすいプログラムの選択も可能になると考えられる。

研究成果の概要(英文)：For a physician, communication with patients, their families and other medical professionals is essential. Our research was on communication education program in medical schools selected by MEXT as GP. We obtained information and conducted semi-structured interviews concerning objectives, learning strategies and assessments of each program. The programs were then categorized into types according to their objectives. Promoting and inhibitory factors were also investigated.

The objectives and learning strategies were incredibly diverse but are mutually related. Most assessment methods were unsuitable to evaluate communication ability.

Categorization of the educational programs for communication may enable us to find the most suitable learning strategies and assessment methods for medical schools.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：境界医学、医療社会学

キーワード：医学教育 コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

医師には、患者との信頼関係の構築と医療チームでの円滑な連携が求められている。また、後継者の指導、一般市民の啓発も必要のため、多様なコミュニケーション能力が求められている。このため、卒前医学教育においても多様なコミュニケーション教育が展開されている。

実際に、平成 15-22 年の文部科学省の「国公私立大を通じた大学教育改革」の支援事業（GP: 特色ある大学教育支援、現代的教育ニーズ取組支援、質の高い大学教育推進、大学教育・学生支援プログラム）の採択状況（932 件）をみると、医学部および医科大学での教育を主題とした医学教育改革を含む取組が 71 件（全体の 7.6%）であった。このうち、43 件（60.6%）がコミュニケーション教育を主体とした取組であった。このことから医学部におけるコミュニケーション教育が重点課題として考えられていると推測される。

このように、すでに、全国の医学部・医科大学において様々なコミュニケーション教育が展開されており、学術誌に数多くの事例が紹介されている。しかし、取組の類型化、あるいは類型と有効性との関係を検討した報告はほとんどみられない（米国の AAMC*、ACGME**ではプロジェクトとしてモデルカリキュラムを検討中）。また、たとえば、同じコミュニケーション教育でも、「患者・医師関係の構築」と「診療チーム内での同僚や他職種との連携」について教える場合、必ずしも同じ方法や評価が適切とは限らない。そこで、本研究では、コミュニケーション教育の多様な取組を目標や方略から類型化し、類型と有効性との関係を検討する。同時に、効果の促進・阻害因子を検討した。

*AAMC: Association of American Medical Colleges

**ACGME: The Accreditation Council for Graduate Medical Education

2. 研究の目的

医師が診療を実践するうえで、患者、家族、他職種とのコミュニケーションは必須である。このため、海外の教育目標や日本のモデルコアカリキュラムでも学習必須事項としてコミュニケーション能力の養成が欠かせないとされている。すでに、全国の医学部・医科大学において様々なコミュニケーション教育が展開されているが、多種多様な方略・評価があり、どのような方略が本来の目標に適するかは必ずしも明らかではない。そこで、本研究では、文部科学省からコミュニケーション教育のモデルプログラムとして採択された取組を対象に、半構造化面接法による「聞き取り調査」を行い、目標、方略、評価から取組の類型化を行い、実施上の促進因子、阻害因子を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

文部科学省から医学部・医科大学におけるコミュニケーション教育の GP として採択された 43 の取組を対象に、まず、取組成果報告書や教育要綱などの資料調査を行った。そのうえで

(1) 聞き取り調査

モデルプログラムとして GP に採択された医学部・医科大学の取組 43 件（学校数に換算すると 30 校、うち 1 校は横浜市立大学）を対象として、推進責任者や担当者からの聞き取り調査を行った。

聞き取り調査内容としては、資料（各取組の「申請書」や「取組成果報告書」）調査によりコミュニケーション教育の類型化を行い、聞き取り内容に基づいて調査票を作成した。また、各取組の推進責任者および担当者を対象とした半構造化面接法による「聞き取り調査」を実施した。

聞き取り項目は、米国の「ACGME Outcome Project: ADVANCE EDUCATION INTERPERSONAL AND COMMUNICATION SKILLS」を参考として、コミュニケーション教育の目的・目標（患者医師関係、多職種連携、地域医療貢献、患者教育、地域住民・市民の啓発など）、方略（講義、見学、実習、映画・ビデオ、ロールプレイ、モデルケースの検討、フィールドワーク、カンファレンス、セミナー、ディベート、症例検討、PBL チュートリアル・TBL、有意事象分析など）、評価法（観察記録、360 度フィードバック、ポートフォリオ評価など）および評価者、実施上の阻害因子、実施上の促進因子、医学科カリキュラムに組み込む上での工夫と問題点、プログラム全体の評価、改善法等とした。

(2) 聞き取り調査の集計・分析

各取組を目標と方略という視点から類型化して一覧表を作成

類型ごとに取組の目標・方略と実際の効果との関係

有効性の高い取組みにおける、効果促進因子の同定

有効性の低い取組みにおける、効果阻害因子の同定

プログラムの継続性に、類型、促進因子、阻害因子のうちどれが最も大きな影響を及ぼしているのかを検討

この結果、どのようなコミュニケーション教育プログラムが目的に合い、効果が大きく、実現可能で、継続させやすいかを明らかにできると考えた。

4. 研究成果

まず、コミュニケーション教育を学習目標別に分類したところ、図 1-A のような傾向を認め、患者-医師関係が最多であった。

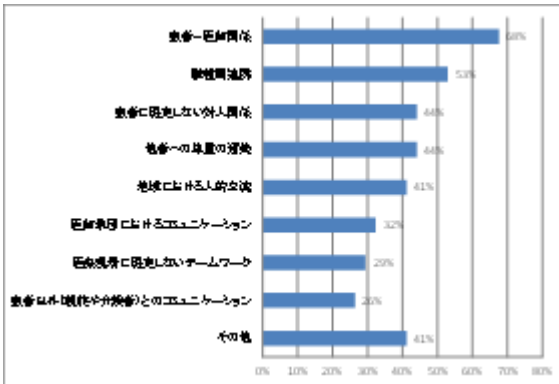


図 1-A コミュニケーション教育のモデルプログラムにおける学習目標別比率

同様に、方略別に分類したところ、図 1-B のような傾向を認め、見学・体験学習が最多であった。

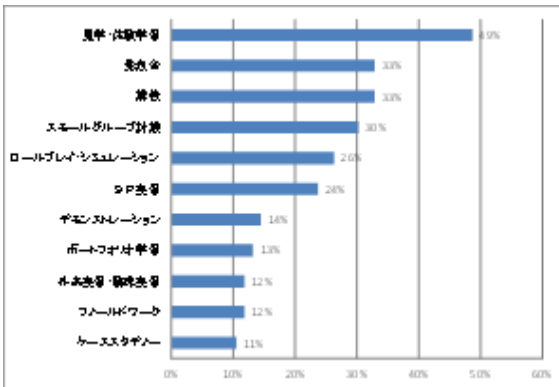
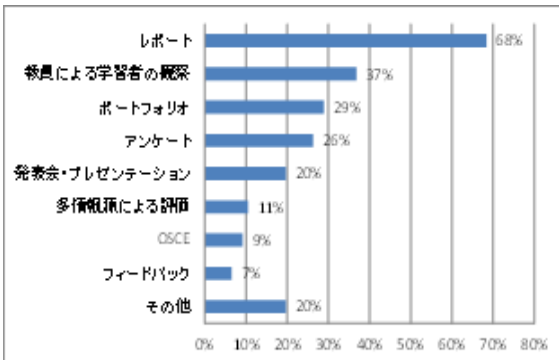


図 1-B コミュニケーション教育のモデルプログラムにおける方略別比率

さらに評価による分類を行ったところ、図 2 のようにレポートによる評価が最も多かったが、レポートは出欠の代わりとして利用されることが多く、適切な評価方法とは考えにくい。また、方略と評価の組み合わせにも類型があることが分かった。

図 2 コミュニケーション教育の



モデルプログラムにおける評価方法別比率

それぞれの方略に伴う有効性や制約を明らかにするために、実施する上での促進因子と阻害因子の内訳を表 1、表 2 に示した。

表 1 方略ごとの促進因子の内訳

方略	促進因子				
	学生の満足度	協力者・理解者	外部評価	専務職員の協力	その他
見学・体験	27%	100%	9%	18%	18%
発表会	24%	76%	8%	16%	24%
講義	28%	72%	8%	12%	32%
SGL	17%	48%	9%	4%	26%
SP実習	16%	47%	5%	11%	58%

表 2 方略ごとの阻害因子の内訳

方略	阻害因子						
	学生の態度	カリキュラム時間不足	教員・スタッフ不足	理解者・協力者の不足	協力施設の不足	資金面	その他
見学・体験	27%	23%	18%	18%	27%	14%	18%
発表会	8%	12%	8%	8%	8%	0%	0%
講義	20%	12%	36%	16%	24%	8%	12%
SGL	9%	17%	30%	13%	26%	13%	13%
SP実習	11%	16%	26%	0%	0%	5%	21%

この結果、促進因子として、「学内外の理解者・協力者の存在」がどの方略でも最多であった。その他の因子に関しては各方略により因子は異なっていた。阻害因子として、講義・小グループ学習(SGL)・模擬患者型(SP)実習では教員・スタッフの不足が最も多く挙げられ、見学・体験型では、学生の態度、協力施設の不足が最も多く指摘された。

以上の結果から、目標や方略は、多様であるが、相互に関連性を示すことが分かった。しかし、評価は不完全な取組が多く、改善が必要であることと考えられた。

このようにコミュニケーション教育のモデルプログラムを類型化することで、学習目標にマッチし、有効性が高く、制約が小さな教育方法や評価を選択することが可能になると考えられる。また、継続しやすいプログラムの選択も可能になると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

- 朝比奈真由美、河本慶子、宮田靖志、野村英樹、尾藤誠司、板井孝壱郎、浅井篤、天野隆弘、井上千鹿子、大生定義、後藤英司、医師養成課程におけるプロフェッショナルリズム教育の現状調査、医学教育、査読無、43 巻、2012、447-452
- 西井正造、後藤英司、医学と看護学の学生間連携活動の推進 横浜市立大学における安全・コミュニケーション教育、医療の質、安全学会誌、査読無、6 巻、2011、368-370

〔学会発表〕(計 13 件)

- 森由美、稲森正彦、井上祥、吉川奈緒美、松浦瑞恵、関野雄典、飯田洋、野中

敬、井田智則、日下部明彦、中島淳、前田慎、後藤英司、上部消化管内視鏡検査における教育支援 画像因子の定量化、第 45 回医学教育学会大会、千葉、2013.7.26

長嶋洋治、青木一郎、大橋健一、石ヶ坪良明、梅村敏、寺内康夫、前田慎、田中章景、益田宗孝、遠藤格、後藤英司、横浜市立大学における学生症例検討会(学生 CPC)の経験、第 45 回医学教育学会大会、千葉、2013.7.26

吉川奈緒美、野中敬、井上祥、森由美、稲森正彦、後藤英司、看護学生の消化器症状に関する調査 問診票 QUEST と GerDQ を実施して、第 45 回医学教育学会大会、千葉、2013.7.26

稲森正彦、日下部明彦、後藤英司、地域医療教育の一環としての胃瘻教育 卒前・初期研修・後期研修シームレスな体制を目指して、第 45 回医学教育学会大会、千葉、2013.7.26

井上祥、飯田洋、西井正造、吉川奈緒美、森由美、稲森正彦、後藤英司、情報通信デバイスを用いた授業の試み、第 45 回医学教育学会大会、千葉、2013.7.26

後藤英司、卒前における安全教育統合カリキュラム、慶應義塾大学医療系三学部合同教育第 2 回シンポジウム、東京、2013.7.6

稲森正彦、関野雄典、飯田洋、遠藤宏樹、野中敬、古出智子、日下部明彦、中島淳、前田慎、後藤英司、Social Networking Service(SNS)を用いた医育機関からの情報発信、第 110 回日本内科学会講演会、東京、2013.4.14

西井正造、井上千鹿子、井上祥、吉川奈緒美、森由美、笠原亮、稲森正彦、後藤英司、第 44 回日本医学教育学会大会、横浜、2012.7.27

井上祥、西井正造、吉川奈緒美、森由美、稲森正彦、後藤英司、医師国家試験必修問題の傾斜配点に対する医学生の認識、第 44 回日本医学教育学会大会、横浜、2012.7.27

仁田善雄、林瑞希、齋藤宣彦、後藤英司、福田康一郎、共用試験医学系 CBT における項目反応理論を用いた得点分布の長期的研究、第 44 回日本医学教育学会大会、横浜、2012.7.27

後藤英司、医学共用試験実施までの歩みと課題、第 153 回日本獣医学会学術集会、第 5 回獣医学教育改革委員会シンポジウム、大宮、2012.3.27

朝比奈真由美、河本慶子、宮田靖志、野村英樹、尾藤誠司、板井孝吉郎、浅井篤、天野隆弘、大生定義、後藤英司、医師養成におけるプロフェッショナルリズム教育の現状調査、第 43 回日本医学教育学会大会、広島、2011.7.22

宮田靖志、野村英樹、尾藤誠司、河本慶

子、朝比奈真由美、板井孝吉郎、浅井篤、天野隆弘、大生定義、後藤英司、提言 医師養成課程におけるプロフェッショナルリズム教育の導入と具体化について、第 43 回日本医学教育学会大会、広島、2011.7.22

〔図書〕(計 2 件)

後藤英司、稲森正彦、井上祥、田部井正、メジカルレビュー社、病棟の困ったを解決!マイナートラブル対処法、2012、192
リチャードクルーズ・シルヴィアクルーズ・イヴォンヌシュタイナート編著、日本医学教育学会 倫理プロフェッショナルリズム委員会 監訳(第 10 章翻訳 後藤英司、井上祥)、日本評論社、医療プロフェッショナルリズム教育:理論と原則、2012、264

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)
取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等
横浜市立大学大学院医学研究科・医学部医学科 医学教育学ホームページ
<http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~goto/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

後藤 英司 (GOTOH Eiji)
横浜市立大学・医学研究科・教授
研究者番号: 30153753

(2) 連携研究者

青木 昭子 (AOKI Akiko)
東京医科大学八王子医療センター・総合診療科・准教授
研究者番号: 80315811